



1278
12

村田

朝夷巡嶋記全傳第三編卷之二

東都

曲亭主人編輯



中輯第廿三

友よ引る小松の宿
途み吻く轍の江敷

朝夷三郎義秀ハ江三廣光を伴ひり。義邦の迹を慕ふ。加賀の小松と
さる當のいそぐと。此れハ廣光ハ曩ハ八嶋室平ガ殿兵ホと柱ト。是左の殿ハ
薄傷を負へり。さる瘻ハあふれハ義秀ハ告じり。信濃路ハ出り。比
より漸々小腫痛々。歩の運び自由あり。まゝ頻々焦燥。亦て
まどありけり。義秀ハこのと。廣光ガ金瘡を。知りて。敬篤言。か
かて。の。義邦ハ追著。と。あり。有。繫。捨。て。小松の郷。ま。來。れ
勤。或。激。技。披。中。行。思。ひ。の。外。宿。を。か。移。小松の郷。ま。來。れ

月長三編卷二

とも佐味空内八謙倉の召使まゝ今この里に在るる義邦も亦りて
 後まゝ人こそ其処は俟へたれども井平はさうづ心利なるあり
 里は旅寝しと俟とりやとさひく二人道次つらぬとさうづの
 相譚ふ義秀は去歳の九月この地は遊歴をくけま女内八相
 且くさうづ逗留し冠者の旅宿を尋んとく里盡れ客店宿り
 ちろ廣光が金瘡は膏藥を打せぬと三日保養させ義秀は
 毎日小街頭より彼此を徘徊し彼人々を索る小義邦由井平
 面影似し人ふどもゆ遭つとそ次の日由晨明し旅宿を
 里の圪橋をうち渡り申明亭の邊を過り目今新に掛ける
 あり高牌の下小人の骨相書三四枚貼たるを里の老弱路
 人んとく其処は集合る肩を比べ肘を連ひて蟻の井附は似り

義秀は其の形勢のろかるるのありありなる衆人の後方より
 これをさるるこの骨相書八別人のふと義邦主後と井平と
 写し出り罪科の趣を記しはち搦捕し進みさる如此この賞
 せん在処を知りぬの許稟はら同類ありとも方の咎を宥免て
 祿を賜ふと鮮やふ書しける原来さうづありけりさうづも
 さうづさうづさうづさうづさうづさうづさうづさうづさう
 冠者八何処に在るさうづさうづさうづさうづさうづさう
 さうづさうづさうづさうづさうづさうづさうづさうづさ
 といふ義秀はゆりけりさうづさうづさうづさうづさうづさ
 愈も進退不便さうづさうづさうづさうづさうづさうづさ

して和敷を救ふべし。勇士ハ元を喪ふと代志ききとて。命を義に
 ようて。鳩毛より軽きべし。今更驚くこと。とうとう。白の激せ。廣光感
 涙を拭ひあせ。かく。や。ふ。い。つ。つ。我。か。の。が。ら。ら。の。や。の。ふ。せ。ふ。君。が。仁。義。と。さ。ふ。
 ぬ。ふ。然。れ。が。と。く。共。侶。ふ。あ。り。ま。し。う。ん。の。究。て。危。し。の。ふ。せ。ま。り。と。當
 惑の小頭を霎時傾。義秀ハ父死。自。我。解。後。方。を。つ。て。り。て。
 長談ハ憚。あり。所詮和敷を技披。越中。婦。負。の。岩。神。あ。る。稻。向
 判五。宿。所。を。退。く。べ。し。こ。ま。お。の。小。唄。子。井。平。ハ。思。慮。あ。る。の。之。佐。味。が
 この地。を。な。ま。ざ。と。ゆ。ふ。冠。者。ハ。俱。く。虚。と。さ。ら。ら。小。豆。苗。ま。づ。も。あ。せ。
 何。と。あ。れ。が。その。夜。さ。り。和。敷。ハ。一。人。留。り。て。領。主。の。討。兵。を。引。受。り。あ。つ。ふ。ハ
 その初。より。和。敷。の。存。亡。ハ。定。ま。り。又。義。秀。が。和。敷。を。救。ふ。共。小。迹。より。来
 る。と。あ。ら。ね。ば。久。く。この。地。は。俟。へ。る。と。倘。彼。葉。二。郎。を。傳。遣。せ。し。和。敷。の

内室。良。井。の。途。不。冠。者。ハ。追。著。と。ふ。口。状。を。必。傳。入。然。あ。ら。あ。ら
 吉見。殿。の。小。松。ハ。趣。く。井。平。亦。命。共。侶。ハ。稻。向。許。落。る。吾。伯。を
 俟。め。や。あ。ら。ん。見。も。亦。知。ら。ず。と。そ。れ。も。あ。れ。追。捕。の。沙。汰。殿。重。丸。ハ
 今。ハ。霎。時。由。單。り。ぬ。只。義。秀。ふ。ら。任。り。と。出。る。人。と。い。そ。う。せ。廣。光。こ。の
 議。ハ。後。ひ。く。苦。痛。を。忍。び。て。行。装。と。その。間。ハ。義。秀。ハ。あ。ら。石。で。房。錢。と
 取。り。せ。同。約。の。病。著。も。大。く。不。癒。ア。ね。羽。と。と。く。ど。左。ノ。右。ハ。む。い。を。死。せ。ら。る
 且。今。より。起。し。も。四。五。里。ハ。あ。く。べ。復。し。を。來。め。と。い。ひ。け。く。と。外。面。へ。立
 出。れ。ハ。廣。光。由。後。ハ。跟。れ。て。疼。痛。を。忍。び。り。共。小。板。敷。ハ。尻。を。う。け。て
 草。鞋。を。穿。け。行。本。を。背。負。ひ。坐。り。て。出。る。行。は。あ。ら。ハ。門。邊。ハ。こ。ま。を
 送り。後。の。宿。り。を。契。り。け。り。か。つ。て。義。秀。ハ。廣。光。を。勅。り。越。路。を。投。て。赴
 く。小。廣。光。ハ。人。目。を。り。旅。宿。を。出。る。耐。あ。ら。そ。馬。歩。小。運。び。り。こ。ま。こ。ま。堪。え。れ

吟いし負水ハ忌むのれどもこれとて飲せしめて命終るべしそれも
 益あり只今負うる瘡かゝる薬とも與人に傳ふるあつたれと吐裏よ
 尋思しつらむ越えろぬりまらふ水ハあけまごも田井を索めり
 汲りてまん且くあお俵多しといひく腰あつ瓢を撈て迫ふんち山田の
 裾不桶の口あんとひりり点尻足お信しく走まけり廣光霎時目送りて
 流る涙を揮拂ひ日来ハ猛死壯士が心のどけ技掖死背負んとやなく
 真成不勤誠ハ親族でもよふ有る死ぬ意縁ハ伴侶世ハ惻隱と彼
 諺も今をさつれあれたの命もさまづとくこと故不彼人さくさく
 遭ふこれ彼人を害さるんかくそそといひ信といらんや瘡ハ灸所を外れ
 ぬいど破傷風とありくもかめても生ごう縦霎時存命とも
 帰負やせいでるあつたれ只この俵ハ自殺しく彼人の為主君の鳥よ

策を送まへ一吁あつたりとひらきとざち氣氣激しても弱りゆく肘と搦りて
 なや小腰あつ黒斗を援却一懐紙を引伸し墨ハ漆ても首の戦々
 筆の運びさ定めあれた世のきささひ送まへ終一技のあつたぬの
 あられ現今成限りの命毛とさるん妻も子も俵人忠義家と忘れ
 めの狐何歎く死愚痴じつ小三二ハとええく君も住てたれた志を嗣よ
 多ひ子あつ朝夷生の男の家よ才をさるんもかきもて在ぬべし
 かるはれ主君の何の里よとらさるとも廣光が亡魂ハ影小立才小添て
 けあつり守り守り人かちも朝夷生日来の女抱受るこの世小
 して六報ひく名残惜やといへえふ心あつ胸も浮め幾
 救う書損る紙引列表て筆をとめて讀む一通追捕嚴重あつり
 美邦系秀井平ハ云云の河原も共侶よ入水といぬ某深瘡と



金瘡の苦
 みく廣光
 策を遣さ
 んとす

直良三番巻二



ひろ光

指し示し江生六郎と識さる。こま不是とぞ思入その名をるるは豫てのいひ死
 在司駿の一三と告まの廣光やましく飲ひ膝折敷くを二六禁めて馳て
 對面と景二郎由傷まをり三三ぬハ僕まよこの処へ來つるを不審
 ぢひ多し人僕ハその夜さり朝夷ぬの指揮ハ後ハ内室中子息は俱
 ちあつせ夜を日小継と急し一幾日あつて越中ある岩神の里縮
 向ぬの宿所といひたれて一三殿ハ對面ハ竊ハ縁由を告ぐ朝夷ぬの
 消息をいひまじ隨ハ遮ふけしハ躬く閑室ハ招入らまあハハ夫婦
 出迎へ朝夷ぬの安不齊同浅良井殿ハより成竹ハ小三夜を慰へ
 その数待等閑あつて友鶴ハ對面ハ朝夷殿ハ異ハあつてハ成
 ちあつせせめりまことまのあこの母子を奥ハ潜せ僕ハ酒食と賜て
 草鞋錢ハ牽れらうわて次の日僕ハ成りまんと思ひしその曉がこ

より胃痛とて天ハ明とまじも枕あつてむぢハ親を刀野小暮せ復や
 故主を冤家のぬ小謀れらうが朽をさ小親苗四郎ハ産を親族ハ
 うち任せ小兒を背負その母所を技掖々幾十里の長途とまア
 此彼の心労小よらまは是より毎日ハあハハ夫婦二三ぬの直成ハ
 人ハ冊々看病せまハ醫醫療等閑あつてまハ僅ハ四日なるまア
 胸痛ハオハ愈小死と告まハ一三とまハ又夫の日より夕殿ハ下知と
 ま吉見主後朝夷ホその後まてハ四人骨相書をのりまハ
 罪科の越如此とことまや岩神へも徇らまてりこれより圖定ハ曾の
 憂苦をやりまのびくまとやんかやあハ死と主人ハ夫婦ハ及ぬの
 僕ま額を合せ浅良井とハ小相譚とも先づらぬハ涙のま往方も
 まぬぬ達と案ハともハ智恵の出ままことハ聊ハまをぬら

ちくちくひひけり人々の助け成りつる佛の不可思議儒の所云天をば疾この
 復小乗根り岩神へ赴れり。疾養生を志多し。吾ハ和氣小成なり。亦復
 亦復冠者の往方を索ん。とくと勸む。廣光感嘆慚愧し。涙を禁め
 難くも。太息をつれ。孝子の門の不忠あり。義士の族は薄情なり。
 再び必死を脱するは。自是和君が助。廣光がこの喜びを。半冠者小分
 早せ。今さう物を。とらんや人の情。小よ。主君と迎。れんぬ
 和氣復小乗ら。とて冠者。が。へ。来。や。ん。や。さ。う。小命を全して。後
 日を。真の忠信。の。子。を。定規。め。つ。お。ろ。と。罵。激。し。と。三。と。葉。二。郎。小
 目。注。ぎ。と。西。人。齊。一。廣。光。が。も。代。合。り。腰。を。抱。え。揚。げ。こ。ろ。を。か。く
 復與小扛。無。せ。り。當。下。根。成。莖。平。ハ。息。杖。成。横。た。り。義。未。だ。が。ほ。と

小居下り。恭。く。跪。れ。を。度。の。再。会。を。祝。せ。り。義。秀。これ。を。勞。ひ。て。廣。光。が
 人を。葉。二。郎。が。耳。を。引。く。云。云。と。密。語。ハ。葉。二。郎。も。ち。根。成。ホ。小。意
 味。成。り。復。與。と。搦。出。さ。る。その。方。ハ。後。方。小。引。添。て。舊。来。一。路。赴。れ。ぬ。二。三。ハ
 その。ま。つ。ろ。成。り。そ。が。や。殘。留。ま。り。義。秀。こ。と。う。ち。對。ひ。て。松。の。株。小。尻。と。掛。阿
 爺。ハ。廣。光。が。氣。色。を。と。ん。ど。る。渠。重。病。又。焦。燥。と。腹。を。切。ん。と。つ。つ。と。死。吾。俯
 折。り。立。え。り。更。小。阿。爺。ホ。ガ。助。け。成。り。遂。小。その。死。を。禁。め。り。の。ら。で。も。女
 才。あ。ら。む。あ。れ。も。寔。は。重。丸。金。瘡。あ。ま。り。只。ぬ。抱。と。憑。む。の。と。某。か。つ。より
 別。ま。り。義。邦。井。平。ホ。小。環。會。廣。光。夫。婦。が。ま。ろ。代。休。人。縮。向。夫。婦。友
 鶴。ホ。よ。う。ま。ろ。ゆ。と。ま。り。と。ひ。ひ。け。り。立。ん。と。三。聯。と。推。と。め
 こそ。も。く。他。の。え。ぬ。人。を。吾。俯。が。ま。ろ。く。ま。ろ。く。ま。ろ。誰。が。を。と。ま。り。ひ。ひ。ひ
 件。の。沙。汰。を。や。り。し。り。縮。向。殿。の。お。ち。り。内。室。の。周。章。悲。歎。友。鶴。の。平。小。由

あまのつらさ腹ふら當てつら日小なり目かたつ間が透るは是首の
 隅彼知の隅小位なり。そまを亂る病む二親をなすも鬱悒胸すさふりて
 和殿小環會おろかつんと思ふが鬼毛可の心あて成よふ昼夜長途成
 走りてつらさまで逢あが放り何知遣るべんおのふが虚言欺実の欺の
 こをを万々妻子の歎れをさひ汲も且岩神へかり更還り更と縁か下。遠く
 懐と搔撈アろく友物書封をどう出てる小透せ共封皮を剥披読
 果て幾條ある裂長く袂小納め女子いようのよあつて心狭れあられ
 かもあええらるあが勇士の妻よ似げあれ所行假深の別を惜も冤屈小
 驚死厭鬼く夫を膝小引著おとも天の化せる禍が福と知んを所爺とく
 あつて見入る。これ友鶴成娶るぬ前小彼友達のるをいり。そのある妻の
 顔を刀んとく危窮の友を憐む初より友垣を結ばぬあまくと縁さあ

さやと義小男む滅を感じて一三ハ又りりありなり且一と弄つて
 松葉を捨てておちち拂ひさるるとも彼友達の在処を知りぬあつて
 一ヶ月あつて死歎二年三年あつて逢さる死歎あつて逢さるとも不定さ
 下び岩神へ還る更小旅さるも今より逢るあまを路次小面を曝しより
 隠さく時を待てよけれおん是小養力ありとも旅よあまハいと危一柱
 愚案は随ひる人と復諫まら荒介と笑まらまらるるも幾千騎よ
 困るるとも。入境をゆくより易り。倘運竭あ小敵ゆも大刀折さる生拘る人
 かく謙倉小牽るとも。これおのづから處分あり命小恙を思へ。彼友達城家
 二年あつて遭さる三歳経る岩神へ還る人。そのあつてを箱向氏と交際
 侍へてつらさめく阿爺小あひぬま心かまらあけさども只いと暗れ去歳の
 その月。浅良井よ領ら。母の像見の舊衣その夜さる彼女房いと睨りされば

取忘れし疑ひあり。と云ふに三つうち微笑する吾侪も認るる母也。かゝ織の甲
 衣被ち。たるふあえん。と云ふれ。今あるあり。和主が身もかえり。し
 とのりく領けし衣。あまのこ。その宵腰は著て吉見の宿野を出ぬれと。
 浅良井と云ふ物。友鶴との小處。と云ふ。五吾侪も其妙小居ありて。和主が
 孝心彼婦人の篤実律義。我折り。今あるあり。と説示せし義秀。咲て
 頭を拵。拵。忙し折あるふ。衣も。二。ある宝といひ。し。成。
 うち。心。せ。推。友鶴は。流石の武士の妻ありけり。
 人。信あり。亦信あり。友鶴は。愧て。人を。歎
 く。只。彼の衣を。実の母も。義秀と。慰め。由。せ。
 今宵。宿。不相。と。又。義秀が。面。を。
 二。旦。ひ。つ。ふ。慚。て。異。ある。成。せん。致。さ。ふ。う。く。藁。二。郎。ぬ。こ。

松原のあまのゆ。和殿を等と密語。渠ホを先へ遣。今。さ。を。得
 こ。日影も既。傾。ぬ。疾。ま。人。と。い。そ。が。三。三。さ。く。嗟
 歎。ら。肚。巻。る。行。囊。より。一。包。の。金。と。り。出。し。緊。要。の。料。ふ。と。く。稻
 向。ぬ。の。處。と。され。切。く。受。納。し。路。費。お。せ。し。本。望。あ。る。ん。
 九。人。の。了。簡。ハ。勇。士。の。あ。ら。ろ。と。表。裏。中。で。ま。ぐ。及。ぬ。と。の。あ。れ。ハ。ま
 ず。怒。ま。叱。ら。る。と。も。岩。神。へ。付。ん。と。い。ひ。ぬ。え。ん。や。と。云。成。納。め。又
 と。真。成。不。勸。ま。ハ。義。秀。取。ら。ち。戴。れ。こ。の。高。金。ハ。分。過。と。り。さ。れ。男。の
 好。意。と。れ。え。推。辞。く。路。費。お。せ。し。と。懐。中。へ。楚。と。納。め。て。方。を。起。せ。ハ。
 一。二。の。亦。身。を。起。し。和。主。ハ。何。國。を。心。あ。て。ふ。彼。人。達。を。索。め。あ。そ。あ。そ。く。ま。ま
 友。鶴。と。又。一。筆。お。ア。と。も。返。さ。さ。と。い。ひ。ま。く。逆。西。を。見。え。り。彼。井。平。が
 舊。里。ハ。近。江。の。又。賀。と。云。の。ろ。ろ。あり。又。信。濃。ゆ。の。氏。族。あ。る。と。い。ひ。必。冠

者しよ不ふ勸くわんく。由よしある里さとの苗なえアアもも且かつ江信二國を常とこく。遺あるあ亦復便宜小
 任ませんその先さきをまは定まめまじま又友鶴へ返書かへしのまは不慮の證據せうことありまつ
 ありあ或あるハ途みちふふり送かしか或ハ賊あひ小掠くわららととありあととははるるとといいふふるるハ口
 づづ。阿爺あぢいいひひめめれれ傳つたへへとといいふふもも患人あひひとのあひ抱かかををテテママ運たりりされ
 そそハ定まめまるるああままつつろろののりり。誘いざひひとといいふふ五ご六ろく町ちやう共とも侶りよふふゆゆ夕日影樹間を
 漏もれれつつ掩おほりりろろ名残ハ竭あぬ林原はやしささららふふゆゆくく別わかれれんんとといいふふとといいふふ義秀よしひで歩あをを駐
 むむままハ二に三さんハ町ちやう嚙くわ小再會を契ちぎアア。途横みちよこぎぎりりててゆゆ人ひとをを木きかかららつつままでで目送めくわり。
 作者云先叔さくしやく第だい二編卷の四の二丁の左ひだりあり。二丁の右みぎ小至こてて義秀よしひでハ
 浅良井小三あさらゐのこさん小葉こは二に郎らうを冊ちゆうけけく。越中婦負えちゅうぶねの岩神いわかみあり。稻向いなむかひが
 宿所しゆくじよへへとといいふふ落おしし遣つせせしし。或廣光ひろみつ小告こるる修しゆ小葉こは二に郎らうをを懐なつくく引太
 郎らうとといいふふつつけけりり。彼引太郎あひひらたうらうといいふふ者ものハ第だい二編の端像はなむねゆゆありあてて葉

二郎にらうが後い身しんええここ忘野わすれのの松原まつがらゆゆ。その伯父おぢ苗四郎なえしやうと共ともハ時夏ときなつ小後こごゆ
 るるゆゆののああままハハ懐なつくくとといいふふ誰たれももささるる。伯老おぢやののむむつつゆゆふふああるる後ごとと刻成こくせい後ご
 又また出でせせるる久正くさだ補おぎなふふ暇ひまああくく。そそががままふふ小幾こ度たび行いきき。因よててままくくめめとといいふ
 のの鄙語へいごゆゆりり證文せうぶんのの出で後ごままるるこのこのままああるるんん欵けん

中輯第廿四
 山寺乃古塔婆
 駒形の老淫婦

吉見尉よしみゑい者もの義邦よしかたハその夜よをを勝澤かつさくの松原まつがらゆゆ。後陣ごじん小敵こてきをを禦入おんいとといいふ
 井平いへいとといいふふ別わかれれ西にしをを望のぞみみ走はるる。ゆゆけけいいとといいふふ仇あひ又また遭あひひ。ああるる度たび伏兵ふくへいののああるるん
 ううとといいふふ足場あしぢやうをを掃はりり。樹こままをを指さしし。半晌はんしやう許ゆる立た在あるるむむ足ありり小こ暗くらがが近ちかくく天あまの
 色いろ倏しゆ忽くつとと結陰くわんいんくく。颯さつとと音ねとといいふふ風かぜののややめめくく。驟しゆ雨あめ盆ぼんをを復たかかぬぬ。樹
 蔭かげののななままつつとといいふふ身みハハ只ただ儒にゆ儒にゆててままりり。ままるるああままとといいふふ井平いへいハハ今いま

あはは 讎言を柱る 欽敷もまかせとや。と想像の心も天の野千玉の暗れさうふ
 降そぐ。雨の樹蔭を出難う。かてまると待宿ふ雨歇雲はかきさりと星
 の光りも明らまゆ。今やまも井平が。敵の囲み成りてまぬお替れより
 けん不便あり。かきませ共侶小大刀の刃の續くやうく。只切死小死へ死めど。
 今かまも時移りぬまろふとも甲斐又やある。井平既小かのど。廣光も
 今かまも領主の討兵を柱る。搦らま。欽敷もま。欽二ツ小違ふへま。
 懇これのま存命て誰とま。小艱苦を凌人死へ死時小死され死ま。
 小やまも恥辱多し。腹を切るとま。刀の鞘ま。成掛ら。い。これ
 ま。短慮へ死の易く。生の難し。三井平ハ移りま。脱し。ま。
 定うあまぬ。早ま。死。亡後小彼ホ。恨ら。やせん。その存亡ハま。
 ま。既。断金の交ある。朝夷生。今ま。現小加北小あ。ま。

この人を訪て。そま。か。く。も。ま。と。曾。小。同。の。胸。小。答。く。被。ま。う。衣。と。か。死
 よ。ま。紋。り。滑。ふ。便。の。拾。ま。取。り。ま。と。と。戴。ま。く。北。國。を。投。て。赴。け。り。公
 は。く。ま。と。哀。れ。あ。る。ま。ま。宿。小。義。邦。ハ。ゆ。く。ま。と。幾。里。も。あ。ま。天。ハ。明。人。の
 往。還。ま。鬱。悒。あ。り。ま。又。ま。ま。再。度。の。追。兵。心。り。ま。か。し。回。道。ま。ま。進。人
 ま。路。あ。れ。途。小。ま。入。り。ま。熟。ぬ。草。鞋。は。破。ま。ま。ま。荊。棘。を。俟。て。足。小
 血。を。染。め。長。衣。裳。裙。ハ。褰。て。も。拂。ぬ。草。ま。ま。と。露。け。り。或。と。ま。ま。倦。ま。ま。
 野。水。小。臨。く。ま。面。影。の。窸。小。驚。鳥。死。死。ハ。嗟。峨。ま。ま。青。巖。小。吻。て。焦。
 夫。牧。童。は。途。成。回。ひ。朝。ハ。林。鳥。と。共。小。ま。ま。夕。の。棲。宿。小。ま。ま。昨。ハ
 郷。黨。の。上。小。在。り。今。ハ。萬。里。の。客。ま。ま。日。は。歩。ま。ま。夜。小。宿。ま。ま。か。く。ま。ま。加
 賀。園。小。松。の。郷。ま。ま。訪。へ。佐。味。坐。内。ハ。蹴。鞠。を。り。て。新。將。軍。頼。家。小
 召。使。と。去。歳。の。春。鎌。倉。へ。系。り。ま。ま。ま。ま。義。邦。ハ。僧。舟。乃。行。儀。ま

まく。公をそとへゆかせども。さぬ容小りて。詰早旅宿をゆく川尻の
 港口。小舟便船を求ふ。さぬ越後の新浮出羽の象浮へ交易船の往還
 する。と月とく絶る。この日由奥の高船。帰帆の纜を解く。あまふ。
 義邦。是の便船。大洋の浮きけり。さまふ。朝夷。義秀。かたぐく。廣光。と
 技掖。小松の郷へ来つ。日と義邦の乗船。同日ゆ。朝と夕の差あまふ。
 音。小送。是をさまふ。只。是時。運といひあまふ。一。十日の遅速。ふりて。その
 往方。さまふ。ふり。船。送。賊。へ。送。る。ふ。あ。ん。か。く。件。の。商。船。を。日
 纜。を。解。く。さ。ま。ふ。次。の。日。より。順。風。早。ゆ。く。此。如。の。港。口。彼。如。の。泊。と。船。歌
 了。小。日。を。送。り。四。月。小。及。く。著。岸。せ。り。さ。ま。ふ。此。の。船。象。浮。へ。八。著。ぎ。て。陸
 奥。國。氣。仙。郡。尾。崎。の。浦。小。還。る。と。義。邦。八。日。の。数。日。熟。ぬ。水。行。は。推。船
 さまて。浦の各屋。は。著。ふ。け。は。更。小。活。く。心。地。く。そ。ま。ま。其。如。小。旅。宿。と

求め且く疲勞を治め。さまふ。さ。ま。て。ゆ。り。里。八。定。め。と。盤。井。郡。高。館。へ。道。の
 程。遠。く。ゆ。あ。ま。ぬ。彼。知。る。叔。父。判。官。の。墳。墓。あり。と。人。の。功。名。武。畧。を
 及。び。ひ。も。か。つ。ぬ。め。の。六。寇。柱。不。幸。薄。命。相。似。と。り。叔。父。の。神。灵。あ。ま。在。さ。ふ。
 同。憂。を。憐。む。ん。や。さ。ま。ふ。戦。死。の。趾。を。訪。ひ。墳。墓。の。昔。を。も。拂。ん。と。く。尾
 崎。の。宿。了。成。せ。れ。ど。も。素。より。急。ぎ。ぬ。旅。あ。ま。二。宿。め。く。高。館。の。古。戦
 場。を。歴。覽。し。水。を。沸。て。山。路。へ。入。り。玉。造。郡。あり。義。経。の。墓。小。并。謁。し。雲
 時。武。運。を。默。祈。り。懷。舊。の。涙。を。伏。死。あ。ま。山。路。を。舊。來。し。隨。小。盤。井。郡。小
 立。入。り。駒。形。山。の。麓。を。過。り。今。朝。を。忘。れ。四。月。の。日。影。ゆ。下。晡。小。あ。ま。ま
 け。この。如。く。さ。ま。ふ。さ。ま。ふ。住。む。人。稀。あり。や。り。客。店。へ。あ。ま。べ。く。も。あ。ま。ま
 と。こ。ん。れ。が。右。心。ある。茂。林。の中。小。一。座。の。梵。刹。あり。て。大。門。ハ。路。傍。小。建。り。仰
 ぐ。扁。額。を。瞻。る。小。指。月。寺。の。三。字。を。題。せ。る。柱。礎。斜。し。門。扇。傾。死



孔
在
近
之
墓

万曆二年七月

附 德有銀屋長等

時建仁二年三月

建仁元年十一月



羽
蟻
の
誰
の
後
の
世
や
捨
宰
都
婆
東
岡
舎
羅
文

建仁四年
劍津寺
貞佐
女人

建仁二年四月

田代印

尋常の造りたるふあつと。秀衡が世ざりぬ。由緒ある道場
 ちとけんと推量らる。日ハ暮んとし。道遠より。あつ宿を乞ふ。と吐
 裏小尋思。角門より進み入る。地内ハ廣く。本堂狭く。草堂
 ちと堂の傍小玄関めたる処あり。庫裏とおろし。死処あり。昔の名残ハ
 夏草の向ふ。礎の墓所の外亦一物あり。美邦ハ玄関のすわり
 近く進み。西三声呼門ども。誰と。師ハ背門小
 ちと。堂を左へ遠く入る。小。跌上り。卵塔多し。豊。土
 饅頭離る。草小包。拂ぬ。昔。花。用く。身。果ハ。誰
 みる。これ。多し。観。外。の。哀。身。入。墓。石。小。彫。り。あ。死
 人の名。一ツ。二ツ。続む。後。小。浄。士。男。と。写。せ。右。辺。小。建。久。四。年。八。月。
 云云。とあり。又。推。あ。る。貞。性。女。人。と。写。し。左。辺。小。建。久。五。年。四。月。

十一日とあり。傷小あり。ち。窳。都。婆。あり。録。せ。梵。文。ハ。體。泯。滅。る。と。色
 とも。梓。氏。治。部。丞。七。回。忌。追。福。拔。苦。与。樂。の。為。正。治。元。年。八。月。施
 主。敬。白。と。大。書。せ。二。十。六。个。字。ハ。鮮。々。ん。え。か。る。度。後。と。羽。蝶
 數。窳。都。婆。の。朽。理。ハ。跋。屢。り。美。邦。ハ。これ。を。ん。と。あ。ろ。の。中。小。あ。く
 評。理。梓。治。部。丞。有。友。ハ。先。人。の。老。臣。あり。當。初。橋。太。左。衛。門。尉。向。保
 ホ。と。共。二。濱。の。宿。の。館。を。成。く。討。子。の。武。士。刀。野。備。杖。照。時。を。防。戦。ひ
 尸。を。一。朝。の。兵。火。小。焼。く。名。を。十。年。の。今。小。留。め。忠。義。ハ。侍。人。て。これ。も
 作。り。ち。あ。る。ひ。ち。あ。く。の。陸。奥。の。果。み。渠。が。為。小。追。善。の。塔
 婆。を。建。し。誰。あ。る。その。親。類。欽。恩。顧。の。者。欽。と。昔。の。人。の。恋。し。た。と
 同。や。り。由。り。墳。堂。惆。悵。と。立。在。了。借。知。小。五。六。歳。あ。る。と。お。は
 ち。死。男。子。袴。の。夾。衣。の。裾。短。あ。る。を。被。く。腰。ハ。一。口。の。短。刀。を。帶。ひ。あ。

二本の卯花小阿伽桶を合々そそく。伴の墓の邊小末の義邦を見ん。
 又見之。その墓小水成は花成の向て跪死合堂。念果く身を
 起し又それを見る。義邦も亦不審。立申ゆきまこの男子を。見
 まばあはひひひてや。進まよりて小腰を折め卒介あゆども。おん力も。
 蒲殿のめん子とゆめえらる。吉見冠者小在まや。と向まて義邦胸
 ち撃けと隠してあ。るまんとおもひうえんと。荒介と笑も。これ八則義邦
 あり抑和殿ハ何人ぞと問えされ。忙しく身を轉しく額をつれ陪臣
 の子でゆへバ及びせあふてふゆり。某ハ梓治部丞有友が家隸馬艱
 標太が一子小同苗標吉郎とゆれ。め故主で治部丞ハ去ぬ。建久
 四年の秋債の宿の館ゆり。討兵を柱陣殺せしと親めて馬養標
 太の乱軍の中お移まころ。そのと死某十五歳又の教訓已て代ゆ母小

俱しく後門より逃れまるとの駒形の麓の郷士田九郡内ガ女房ハ母ガ妹とい
 へ。軀て陸奥小落とる。親子田九小身を寓く年来成経くゆえ。あつ
 る小母ハその次の年持病の血積より誥くま。まろあかり。この月
 りく今日ガ亡日あり。このと死某廿歳小足くま。うち続た。親を喪ひ
 叔母叔母夫をよめ。渡世のものと相禪ふ。郡内小子あり。六則叔母
 の養子小せま。あつこの地小駐ま。又駒形の一村ハ泰衡國衛威
 亡の後漸く凋蔽。今ハ家數四五軒小過。これより養父ガ所徳も
 年々小衰果て初ま。似るくもあ。これさ。去歳の九月下旬。黄泉の
 客とあり。今で。養母と某の。所帯の山の木を伐出。或ハ獸を獵りて
 生活く。くひあり。さてこれ。あ。鳴呼が。く。あ。疑ひを
 釋んが。あ。く。近属世の凡庸小蒲殿のめん子白鳩九ハ下野國足利ま。

人々あり。吉見の冠者義邦と名告せり。あつたれども。後にはけしき
 あり。あつたれども。後にはけしき。あつたれども。後にはけしき。
 やと。あつたれども。後にはけしき。あつたれども。後にはけしき。
 生れさせり。是併古主梓殿及亡父母の導する。致さる。実母の称月を
 とも。生活の暇あり。平日より。ほく詰む。不慮の見え。入る。か
 け。致さる。あつたれども。後にはけしき。あつたれども。後にはけしき。
 り。原來ハ汝ハ梓が老黨標太とやんが子あり。致さる。邊境に呻吟
 へ。舊縁の人と邂逅し。大さ。あつたれども。後にはけしき。あつたれども。後にはけしき。
 これを。義邦と知らる。ぞ。と。回れ。標吉声を。低め。君を。ろ。召れ。き。や。
 追捕の。沙汰。嚴密。り。奥六郡。ハ。バ。さ。あり。住む。人。稀。あり。山里。あり。
 經任一味の。反逆。人。吉見冠者。義邦。そ。等類。某甲。某。し。と。四人。乃。姓

名を識し。骨相書と。某。由。り。ろ。君。が。面影。彼。骨相書。ハ。似。を
 る。あつたれども。後にはけしき。あつたれども。後にはけしき。
 た。ま。入。為。体。いと。訝。く。あ。ひ。が。舊。恩。舊。義。の。竭。さ。り。致。他。人。は
 如此。ん。と。危。なる。の。ふ。り。さ。り。と。真。成。は。密。語。ハ。義。邦。や。り。致。さ。り。
 原來。奥。の。盡。知。り。も。こ。ろ。人。隠。と。あり。現。こ。の。磐。井。の。一。郡。を。經
 任。が。能。る。平。泉。の。柵。ハ。遠。く。と。こ。一。点。也。逆。意。を。終。了。を。修。羅。五
 郎。經。任。が。一味。と。黨。と。せ。り。と。み。あ。り。譏。者。の。誣。罔。あれ。ども。一。朝
 又。説。盡。か。り。汝。故。主。の。恩。義。を。忘。れ。と。有。友。が。み。ふ。七。回。の。罵。罵。を
 受。け。り。その。志。極。く。り。日。に。六。け。の。叔。父。判。官。の。墓。ハ。指。く。この。丸。を。さ。り
 日。ハ。傾。ぬ。宿。を。こ。んと。寺。内。ゆ。り。り。呼。門。ど。も。忘。せ。と。法師。ハ。背。門。ふ。と。ん
 と。と。ひ。く。墓。所。を。過。ら。ん。と。つ。つ。ん。この。寺。伽。藍。の。名。残。あ。る。べ。か。ぞ。か。せ。ぞ

勧めつ。只のりまでも宿の潜せり人と化るるもあはれ歎待し。あはれ似る
 けり。さてその夜さり我邦ハ刀野時夏ハ儒衣を被せられ冤屈よきと
 みて足利を走らす。廣光井平長秀がうさ人あちもあく告る人ハ標
 吉頻ハ敬馬嘆。養母黒萩共侶ハ時夏を悪ク憤。又廣光ハ二人が
 往方ハふと想像のやうく。縁由をゆりし。我邦の薄命をいふ痛
 くも思ひける。あはれ。親子が誠心よ。我邦ハ稍あろちあろ吉見を逐電
 たる夜より。倭ハ四十餘日。今宵をめぐめ枕を中とく。痕ハ就めあ
 へ。却規標吉ハ聊思慮あつめあけ。訪ハ人稀あつ山里ありとく。
 一点も油断せむ。その次の日より。我邦を奥深く潜せ。その刃ハさるぬ
 容より。山拵ハ台心る。さる程ハ夏ハ過。山里ハ衣ハ秋の夜長ハ
 比ふあり。さる。鄙語ハ人の聚語ハ七十五日と定め。所以あつ。我

邦追捕の風声も。遂ハゆえむありけ。標言ハ黒萩と高旦那。吉見敷の
 い。窮屈ハ。えあハ今ハ人目をさる。由要ハ。渠ハ推と人同ハ。
 鎌倉ハ送り。標吉ハ。後才ハ。今ハ怪ハ。此ハ。ト
 とく。我邦ハ由を告。あろ。小憚ら。假借ハ名を。黒萩ハ。叔
 母の。標吉ハ兄の如く。おのひさるを改。我邦ハ。親子ハ人目
 ばりハ使れ。抑件ハ。黒萩ハ原ハ和歌鶴と。大磯の遊行女
 あり。その。女ハ。武士の妻。あろ。妹ハ。河竹の流。二。と。往方
 黒萩ハ。年十六の。と。密夫ハ。誘。出。果ハ。女ハ。售。遣。と。文ハ。往方
 年。才。安。否。を。問。も。せ。ど。問。せ。も。せ。ど。過。る。程。ハ。奥。の。般。若。井。多。豹。形。村。の
 郷。士。田。丸。郡。内。有。一。年。鎌。倉。小。出。府。と。還。留。の。間。の。和。歌。鶴。小。と。く。馴



黒石記

老波女
春心
公子せ
苦しま



いやり吉郎

推ひたる苦痛の声のやめればむりあへん其疾がさるるもむらじ地は何と
いと聞きし黒枝声たえぐふうち臥せしよるもむらじ病が度々
ぞ願ふこの鳩尾を押へんとしあへん頼み喘をくばされん
邦辞さるふよめあへんほろろよつゝのめくその胃腸へ堂々推當く苦
痛はらうよゆ軟と同れく黒枝娛げぬいみ猶廻下ふはる。あつて
飲あつてもやがや。あふはりのとむい合せて抱えよせんといひる邦
怒り堪む。羨み引く黒枝が頭破と打中がやせ恥をさるる老女
多。美邦をのりあつめのとつゝのめく調戲さるる。この狂人の沙汰さへ
り向後と慎む標吉小信と告るる羊ゆも愧よと罵る席を蹴立て
出る黒枝ハ消ぬるるふ打もく雲時りのめりつゝ起る。うら
俯しく西む頭抱へる。その苦痛半响をうらやこれふえり指を

めて艱を拵るふ頃日揺動し糸切齒板齒一枚脱きつり。あか悲しやと
吐出し堂へ受載く惜めどもその甲斐る。腹さへいみ浅間嶽と煙
まとも富士の煙の靡ぬ人今とく怨ハ復されを落魂人を扶持せしむ損
ありく御か。昔も今もいふあつて況や及逆野心の後木を伐り草を刈
拂ひて索らる罪人を合藏のこの廣い世界に二人とよめあつて。その大
恩をさひひらきく屍暖ゆる随小高慢親ももたえん女もも抵抗打が
るか。ろ思えん人てふ。情あ一郎。竟るハ思ひまてせんめを。位つた
潜音ふ通宵むり吠死る。是より先は邦ハ臥房はまりのあつても。そ
まめく睡りむ。つゝとむいえん。これ一旦の奴も乗。黒枝を巻
と短慮といへもあつて。や彼老淫婦を礼ある所を。はまて
これ隨ふ何るあへん婦人の性ハ僻て妬めり。そむる打懲るとも。いろ

